

次の文は、江戸時代の国学者、富士谷御杖ふじたみつえによる随筆の一部分である。これを読んで、後の問に答えよ。(三〇点)

せめてといふ詞、中昔\*までは、ただ迫りてといふ心へのみ用ひたり。古今集に、「いとせめて恋しき時はぬばたまの夜の衣をかへしてぞきる」、その外、例ひくにいとまあらず。しかるにその後、いま俗言にいふに同じきせめてをば、歌にもよむこととなりぬ。げに事がらによりては、いはまほしくおぼゆる時々もある詞なるを、いかでかいにしへ人は、この詞なくて事も<sup>(1)</sup>かかれざりしぞと、心得がたくおぼえしに、万葉集、巻の二に、「妹が家も継ぎて見ましを大和なる大島の嶺ねに家もあらましを」といふ歌を見て、はじめて思ひしりぬるは、この妹が家もといふも文字なり。これ即ち後世のせめての心なるなり。その故は、妹がかほの見まほしきが本意なれど、それかなはねば、せめてその家なりとも、継ぎて見ましをとの心なればなり。これによりて思へば、ふるくはありて後世はなく、後世はありてふるくはなき詞ども多かるも、よくたづねなば、思ひよらぬ詞もて、その用をなしたる事、たがひにあるべしとぞおぼゆる。なほ精ほしくたづぬべきなり。

〔北辺随筆〕より

注(\*)

中昔||ここでは平安時代ごろを指す。

問一 傍線部(1)を、「この詞」の指す内容を明らかにしつつ現代語訳せよ。

問二 傍線部(2)はどのような気持ちを述べたものか、筆者の解釈にしたがって説明せよ。

問三 傍線部(3)はどのようなことか、説明せよ。